

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 21 日現在

機関番号：34431

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730552

研究課題名(和文) 擬似的な適応という視点による幼児期の「いい子」の再考

研究課題名(英文) Reconsideration of "the good child" from the perspective of quasi-adaptation

研究代表者

西元 直美 (Nishimoto, Naomi)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：50390117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：「いい子」の再考を目的として擬似的な適応(擬適応)という概念を検討するため、3～5歳児の擬似的な適応行動(擬適応行動)、ストレス状態、気質、完全主義の縦断データを収集し分析した結果、以下の成果が得られた。1)否定的な感情を抑制する行動を示す幼児のストレスは高かった。2)気質のうち「制御性」「積極的活動性」は変化するが「否定的情動性」に変化は認められなかった。3)擬適応行動に発達的变化は見られなかった。4)完全主義のうち「こだわり・心配」「高目標設定」には変化が見られたが、「完全願望」については見られなかった。5)「完全願望」は擬適応行動と関連があることが示された。

研究成果の概要(英文)：This study examines a concept called quasi-adaptation for the purpose of reconsidering "the good child". For children around 3&#8211;5 years old, longitudinal data was collected on quasi-adaptation behavior, stress condition, temperament, and perfectionism. Analysis revealed the following findings: 1) The stress of a child exhibiting behavior to control negative emotions was high; 2) In terms of temperament, change was seen in "effortful control" and "surgency/extraversion" but not in "negative affectivity"; 3) Developmental change was not seen in quasi-adaptation behavior; 4) In terms of perfectionism, developmental change was seen in "concern over results" and "excessively high standards," but not regarding "desire for perfectionism"; 5) "Desire for perfectionism" was shown to be related to quasi-adaptation behavior.

研究分野：発達心理学

キーワード：擬適応 縦断研究 唾液中 -アミラーゼ 気質 完全主義 幼稚園

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、幼児の擬似的な適応（擬適応）行動について探求するために計画されたものであった。

幼児期にいわゆる「いい子」であったと報告されていた子どもたちのなかに、児童期以降にさまざまな問題が見られたり、困難を抱える子どもたちがいる（長谷川、2000；中野、2003）。保育・幼児教育現場において、大人の言うことをよく聞き、大人の期待に添うように振る舞う子どもたちは、保育者にとって手を煩わされることのない子どもであり、特別な配慮が必要と認識されることは少ない。しかし、そうした一見適応的な子どもたちに対して、保育者は「（問題はないけど）なんとなく気になる」と認識しており、そう認識される子どもの中にはのちに問題が見られる子どもが含まれるのではないだろうか。

筆者は、そうした一見適応的であるが真の「適応」とはいいがたく、顕かに「不適応」とも認識されない状態を「擬似的な適応」として問題意識をもち、『擬適応』と呼んで検討してきた（2007, 2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2010, 2011）。これまでの実証研究によって、保育者が「“いい子だけれど” なんとなく気になる」という認識には、“今” が気になるだけでなく、“将来” が気になるという認識があり、環境に適切で一見適応的に見られる行動のなかには、擬似的な「適応」状態が存在することを示した。また、擬適応行動尺度を作成し、擬適応行動の個人内変化を明らかにしながら、生得的な規定因として「気質」を取り上げ、幼稚園入園前の気質データと幼稚園入園後3年間の擬適応行動縦断データによってその関連を示した。

『擬適応』行動は表面的（外的）には適応行動にも見えるものであるが、心理的（内的）には適応状態ではないと考えられる行動として定義している。しかし、先行研究では擬適応行動の存在を示したにすぎず、その心理的適応状態についての実証研究はまだ行われていなかった。したがって、擬適応行動を示す子どもの心理的な適応状態を捉えるため、擬適応行動を示す子どもの生理指標（唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性測定）に基づくストレス状態について検討することが必要であった。

本研究では、擬適応行動に関連する心理的特性として「気質」に注目している。「気質」に関しては、生得的な遺伝的要素が強調される一方で、環境との相互作用により変容する側面が指摘（Rothbart & Bates, 1998）されている。そのため、擬適応行動の変化と気質の変容の力動的な関連性を検討する必要があると考えた。そうした関連性を明らかにすることは、適応行動の機序を解明するための有用な資料の呈示となることが期待された。発達初期における気質と、その後の社会的行動や問題行動影響との関係についての研究はこれまで数多くなされている

（Kagan, 1988; Eisenberg, 1998; Paterson & Sanson, 1999）。しかし、日本においては菅原ら（1999）による縦断研究や、水野・本城（1998）などの研究が見受けられるものの、幼児期の気質の変容とその要因についての知見はまだ不十分である。そこで、気質の変容およびその要因についての検討を必要とした。

さらに、擬適応行動との関連が考えられる要因として「完全主義」を挙げられた。完全主義は「状況によって必要とされるよりも、高い遂行の質を自分自身あるいは他者にあまりに多くを要求する癖」（Hollender, 1978）、「あまりにも否定的な自己評価をともなった過度に高い遂行基準を設定すること」（Frost et al., 1990）と定義されている。完全性を求めることは一般的に望ましいことである。しかし過度に完全性を求めることは適応状態を脅かすことがある。大学生を対象とした実証研究では、完全主義と抑うつ傾向などの不適応との関連が示されている（Hewitt & Flett, 1990, 1991）。また、小学校高学年を対象とした実証研究においても完全主義と抑うつ傾向との関連が示されている（桜井, 2005）。幼児においても高すぎる目標にむかって努力し、完全に達成することを求める傾向は見受けられる。しかしながら、幼児を対象として完全主義と不適応の関連を検討した研究はなされておらず、完全主義の発達的变化について検討した研究も見受けられなかった。完全主義は擬適応行動という行動の背景に存在することが予想される。両者の関連性を検討することは『擬適応』という概念をさらに明確に定義する上でも有用であり、なおかつ、気質と同様に適応行動の機序を解明するための手がかりとなることが期待された。

これまで、何らかの対応を必要とする「気になる」子の研究は盛んに行われている（井口、2000、本郷ら、2003など）。しかし、大人からみて「手のかからない子」であるけれども本人はがんばりすぎてしまう子どもたちにも注意が必要であろう。児童期、あるいは青年期以降のがんばりすぎに対する警告はなされているものの、幼児のがんばりすぎ、完全主義に焦点をあてた研究はほとんどない。また、気質の発達的变化を検討した実証研究は少なく、幼児の適応行動の発達過程やその要因の力動的変化を検討した研究は見受けられなかった。

本研究で明らかにしようとしたのは、①「擬適応行動」のストレスとの関連、②「気質」の発達的变化、③幼児の「完全主義」の実態ではあった。これらを明らかにすることは幼児期の適応を考える上で有益な情報を提供するものと考えられた。また、本研究の最大の特徴は縦断研究による検討ということにあり、縦断的データにより検討することによって、幼児の適応行動とその要因との力動的変化を明らかにすることが可能となる

と考えられた。

「適応」「不適」「過剰適応」といったさまざまな適応があるが、本研究は『擬適応』という概念を新たな適応概念として提唱しようとするものであった。『擬適応』という状態は、すぐに対応が図られる明確な不適応状態とは異なり、不適応状態のように認識されやすいサインではない。しかし、保育者の「将来が気になる」という認識を基盤として構築した「擬適応」行動というある種の行動は、のちの問題行動の予兆となるのではないかと考えられた。したがって、「擬適応」についての探求は、今後の保育・幼児教育実践における「いい子」についての新たな子ども観を提供するものであり、幼児期から児童期、さらに青年期といったその後の発達過程における適応についての新たな知見を呈示するものと考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究は幼児の擬似的な適応を探求することを目的とするものであり、本研究で明らかにしようとしたことは以下の3点であった。

①擬適応行動とストレス状態との関係进行分析し、擬適応行動と心理的適応との関連を明らかにする。

②幼児期（幼稚園3年間）の気質の変容および擬適応行動との力動的関係を明らかにする。

③幼児期における完全主義を測定する尺度を作成し、その基礎データを収集するとともに、擬適応行動との関係を明らかにする。

これらの結果から、「擬適応」という適応概念を検討し、「擬適応」という視点から幼児期における「いい子」について考察することを目的とした。

## 3. 研究の方法

幼稚園3歳児クラス新入園児について、入園から卒園までの3年間の追跡調査を行った。「気質」、「完全主義」、「擬適応行動」の発達的变化、「ストレス状態」、および個人の環境要因（対人環境についての情報）、日常生活習慣についての情報を、保育者および養育者から収集することとした。具体的には毎年度末に質問紙調査を行い、「気質」、「完全主義」、「擬適応行動」、きょうだい校正、生活習慣に関するデータを収集した。また、質問紙調査を行う時期と同様の時期に幼児のストレス状態について、唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性によるストレス評価を行った。

なお、研究対象者に対しては、研究目的および研究内容、研究計画について口頭で説明を行ったのちに、個別に研究依頼を書面で行い同意書の提出によって研究協力の意志の確認を行った。

### (1) 調査項目・調査内容（測定方法）

①擬適応行動尺度（改訂版）：擬適応行動尺度（西元、2006）（50項目）を簡便に実施できるように、予備調査によって尺度の再構成を行った。擬適応尺度項目は、3因子構造が確

認されており因子は「気質的特徴」「集団不適応」「社会的順応さ」と命名されている。これまでの研究において、「社会的順応さ」が擬適応行動の特徴的因子と位置づけているため、「社会的順応さ」因子項目に焦点化した再調査を行い、尺度を再構成した。

改訂された尺度を用いた本調査の評定者は保育者と養育者であり、実施にあたっては、保育者には担当園児の評定を依頼するとともに、養育者に対して個別に質問紙の配布することと、回収することを依頼した。

### ②幼児用完全主義尺度：多次元完全主義尺度

（Multidimensional Perfectionism Scale: MSP-F）（Hewitt & Flett, 1991の日本語版（桜井・大谷, 1997）、小学4～6年生用の「子ども用多次元自己志向的完全主義尺度（Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale for Children: MSPDC）

（桜井, 2005）から幼児用項目の原案を作成し、予備調査によって新たな尺度を構成した。作成された尺度を用いた本調査の実施手続きは①と同様に行われた。

③気質（CBQ Short Form）：Rothbart, Ahadi, Hershey & Fisher (2001)によって開発された幼児に適用可能な気質質問紙であるCBQの短縮版、CBQ Short Form（Putnam & Rothbart, 2006）を用いた。沼田（2006）によって日本語訳がなされ気質測定が行われており、筆者はこれまでの研究においても用いてきた尺度であった。評定者は養育者のみであり、実施手続きは①②と同様、保育者によって質問紙の配布および回収が行われた。

④対人環境・日常生活習慣：行動の影響を及ぼす環境要因として、きょうだい構成、生活習慣（起床時間、就寝時間、食事時間）についての情報を収集した。回答者は養育者であり、他の質問紙と同様に保育者に質問紙を個別に配布することと回収することを依頼した。

⑤ストレス評価：唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性の測定によるストレス評価を行った。アミラーゼ簡易測定を原理とした唾液アミラーゼモニター（酵素分析装置；ニプロ株式会社）を用いて、保育者の協力のもとで実施された。登園後（午前）と降園前（午後）の1日2回の測定を毎年1回実施した。

### (2) 調査・実験スケジュール

平成24年度は擬適応行動尺度の再検討と幼児用完全主義尺度の作成を行い、年度末には第1回目の本調査を行い縦断調査を開始した。平成25、26年度の年度末には第2回、第3回の本調査を行った。

#### 【平成24年度】

予備調査) 4歳児・5歳児クラスの担当保育者を対象として、①擬適応行動尺度、②完全主義尺度の基礎データを収集した。

本調査 1) 3歳児クラスの担当保育者に①②について、担当園児の評定を依頼した。また、該当園児については、⑤を1回実施した。

#### 【平成25年度】

本調査 2) 4 歳児クラスの担当保育者に①②について、担当園児の評定を依頼した。また、該当園児については、⑤を 1 回実施した。

【平成 26 年度】

本調査 3) 5 歳児クラスの担当保育者に①②について、担当園児の評定を依頼した。また、該当園児については、⑤を 2 回実施した。

(3) 本研究計画での留意点

本研究は縦断研究であることから、縦断データの照合について、養育者からの研究協力同意書を求める際に、養育者が作成した ID (アルファベット 3 文字と数字 3 桁の組み合わせ) の記載を依頼し、その ID をもってすべてのデータの照合を行った。

4. 研究成果

(1) 擬適応行動とストレス状態との関係の検討：ストレス状態の生理指標とした「唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性」について、30kIU/L 未満を低群、60kIU/L 以上を高群として「擬適応行動項目 (養育者評定)」(Table 1) 得点の高群と低群の差の検定を行った。その結果、擬適応行動項目のなかで“嫌なことがあっても怒ったり、不機嫌になることはない”、“大人にも友達にも愛想がよく、いつもにこにこして、嫌な顔をすることはほとんどない”といったネガティブな感情を抑制していることを示す項目について、唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性高群のほうが有意に高いことが示された。ネガティブな感情を抑制することは、他者からは適応的に見られやすい。そうした客観的 (外的) には適応的な行動でありながら、ストレスが高いことが示されたこれらの項目は、擬適応項目としての有効性が実証されたといえる。

一方、“親には甘えるが、園ではお姉さん (お兄さん) ぶっている”という園と家庭での二面性については唾液中  $\alpha$ -アミラーゼ活性低群のほうが有意に高いことが示された。園と家庭での行動の切り替えには心理的負担は少なく、また、「甘える」場所があるということが心理的な不適応とは結びつかないのかもしれない。

これらの結果を踏まえて、擬適応行動尺度の再検討を行うこととした。

Table 1 擬適応行動項目

項目 1	嫌なことがあっても怒ったり、不機嫌になることはない。
項目 2	自分のやりたいことをすぐには言わず、まわりの様子を見てから言う。
項目 3	大人や友だちの言うことを素直に聴き、言われたとおりにする。
項目 4	大人にも友だちにも愛想がよく、いつもにこにこして、嫌な顔をすることはほとんどない。
項目 5	友だちはたくさんいるが、弱い部分を人にみせない。 ※友だちを頼ったりしない
項目 6	親には甘えるが、園ではお姉さん (お兄さん) ぶっている。
項目 7	園でも家でも優等生である。
項目 8	大人の言うことをいつもそつなくこなしている。
項目 9	わがままを言うことがまったくない。
項目 10	まだ遊びたい時でもお片づけの時間になるとすぐに片づける。
項目 11	いつも行儀よく、誰に対しても礼儀がたい。

(2) 幼児期 (幼稚園 3 年間) の気質の変容および擬適応行動との力動的関係の検討：気質について、先行研究において 3 因子構造が示されており、本研究においても 3 因子構造が確認された (Table 2)。そこで、因子レベルでの変化を分析したところ、「制御性 (Effortful Control)」「積極的活動性 (Surgency/Extraversion)」については 3 歳

から 4 歳にかけて上昇することが示されたが、「否定的情動性 (Negative Affectivity)」については変化が見られなかった (Fig. 1)。気質の下位尺度レベルでの変化について、現在分析中であり、発達的に変化する気質と比較的安定している気質の解明をすすめている。

Table 2 幼児用他者評価型完全主義尺度

気質因子	気質下位尺度	
	快 (低度)	快 (高度)
制御性	微笑みと笑い	活動性レベル
	抑制のコントロール	接近/肯定的な予測
	知覚的鋭敏性	衝動性
	反応性の低下/なだまりやすさ	不快
	注意の集中化	怒り/欲求不満
積極的活動性	衝動性	恐れ
	不快	かなしさ
	怒り/欲求不満	
否定的情動性	恐れ	
	かなしさ	

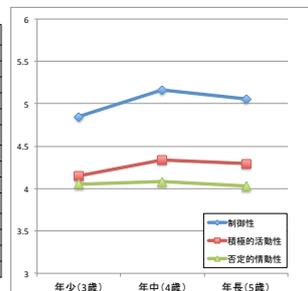


Figure 1 気質因子得点の年齢変化

擬適応行動について、養育者の評定においては 4 歳から 5 歳にかけて減少することが示されたが、保育者の評定においては 3 歳から 5 歳にかけて減少することが示され、評定者間の相違が見受けられた。擬適応行動と気質との関係について、養育者評定を用いて相関関係の検討を行った。その結果、気質因子のうち「制御性」因子と擬適応得点の間に相関関係が認められた (Table 3)。保育者の評定についての検討や、擬適応行動項目についての検討を現在継続している。

Table 3 擬適応行動得点と気質因子との相関

		擬適応行動得点		
		年少(3歳)	年中(4歳)	年長(5歳)
年少(3歳)	制御性	.21*	.33*	.21*
	積極的活動性			
	否定的情動性			
年中(4歳)	制御性	.26*	.37**	.24*
	積極的活動性			
	否定的情動性			
年長(5歳)	制御性		.33**	.28**
	積極的活動性			-.20*
	否定的情動性			

\* p < .05 \*\* p < .015

(3) 幼児期における完全主義を測定する尺度の作成、基礎データの収集および擬適応行動との関係の検討：幼児を対象とした他者評価型の質問項目 (「幼児用他者評価型完全主義尺度」) (Table 2) を作成し、予備調査 (4 歳児、5 歳児対象の横断データの収集) を行った。「幼児用他者評価型完全主義尺度」は 3 因子構造が確認され「こだわり・心配」、「完全願望」、「高目標設定」と命名した。また、予備調査において、完全主義と擬適応との関連を検討したところ、完全主義のうち最後までやり遂げようとする傾向である「完全願望」の高さと擬適応得点の高さとの相関関係が認められた。

本調査 (縦断データの収集) を実施し、完全主義について性差、年齢差について分析した結果、いずれの年齢においても、またどの側面 (因子) においても性差はみられなかった。大学生の完全主義に関する研究では、性差について一貫した結果は得られていない。

幼児における性差についてはさらにデータを重ねて検討する必要がある。

年齢差については、完全主義のうち「こだわり・心配」傾向は3歳から5歳にかけて徐々に上昇する、言い換えれば、ゆっくり発達することが示された。「高目標設定」傾向については、3歳から4歳にかけて顕著に上昇することが示された。高すぎる目標設定をする傾向が幼児期初期に増大し、その後目標の設定が調整可能になるためその傾向がみられなくなると考えられる。「完全願望」については発達の変化がみられなかった。“いったん決めたことは最後までやりとげようとする。”、“やることはすべて完璧にしようとする。”といった項目からなる「完全願望」であるが、擬適応行動得点との関係を見てみると、3～5歳のどの年齢においても両者の相関が示された。また、4歳と5歳では気質の「制御性」と完全主義の「完全願望」との相関が示された。

Table 4 幼児用他者評価型完全主義尺度

<p>「こだわり・心配」因子(10項目)</p> <p>失敗をクヨクヨ悩むほうである。</p> <p>ちょっとした失敗でも、その日一日気にしている。</p> <p>自分がしたことがきちんとできているかいつも心配している。</p> <p>自分がしたことにまちがいがいなか、何度も確かめる。</p> <p>どんなに確かめても間違いがあるのではないかと気にしている。</p> <p>一度失敗すると取り返しがつかないと思っているようだ。</p> <p>自分のしたことに自信が持てていない。</p> <p>きちんとできていても間違いがあるのではないかと心配している。</p> <p>失敗するとそれをとても気にする。</p> <p>忘れ物がないか何度も確かめる。</p>
<p>「完全願望」因子(4項目)</p> <p>いったん決めたことは最後までやりとげようとする。</p> <p>やることはすべて完璧にしようとする。</p> <p>どんなことでも中途半端はいやなようだ。</p> <p>することは全部片付けてしまわないと気がすまない。</p>
<p>「高目標設定」因子(5項目)</p> <p>他の人にはできないような目標をたてる。</p> <p>決してできないような計画をたてる。</p> <p>自分ができること以上の目標をたてる。</p> <p>いつも一番を目指そうとする。</p> <p>まわりの子と同じようにできて満足しない。</p>

(5) 唾液中 $\alpha$ -アミラーゼ活性の検討：本研究では、幼児のストレス状態を測定するために唾液中 $\alpha$ -アミラーゼ活性の測定を行った。唾液中の $\alpha$ -アミラーゼ(唾液アミラーゼ)活性は、交感神経の活動の影響を受けることが報告されており、不快な刺激のもとでは上昇し、快適な刺激のもとでは低下することが見いだされている(浅海ら、2012, 山口、2011, 山口ら、2001)ことから、ストレス反応の指標(ストレスマーカー)として考えられている。唾液の採取は簡便であり負荷が小さいことから幼児にも適用しやすいが、幼児を対象とした基礎データは少なく、発達の検討を行っている研究も少ない。そこで幼児の唾液アミラーゼ活性についての検討を行った。気質との関係について分析した結果、唾液中 $\alpha$ -アミラーゼ活性の高さと、気質の3因子のうち「制御性(Negative Affectivity)」に関わる側面との関係が示された。自己を制御する傾向の強い子どもにストレスの高さが示された。唾液中 $\alpha$ -アミラーゼ活性における性差は示されていないが、唾液中 $\alpha$ -アミラ

ーゼ活性と気質との関係には男女の違いが見受けられた(Fig. 2, 3)。今後、気質における性差の検討も含めて、唾液中 $\alpha$ -アミラーゼ活性と気質との関係を検討していく必要がある。

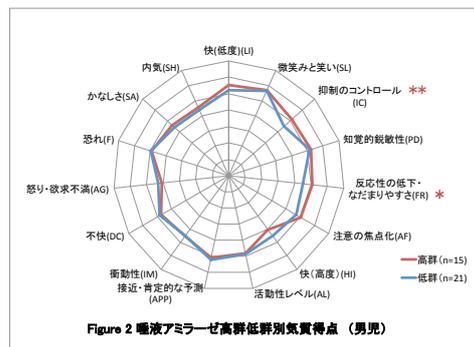


Figure 2 唾液アミラーゼ高群低群別気質得点 (男児)

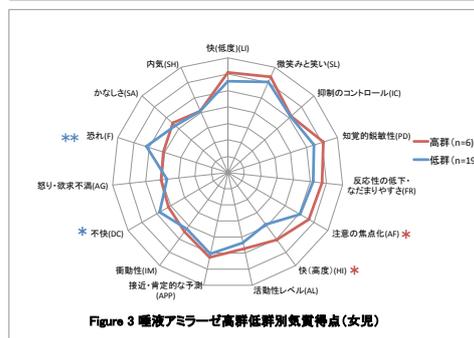


Figure 3 唾液アミラーゼ高群低群別気質得点 (女児)

上述の結果から現在注目しているのは、自己を抑制したりコントロールする心理的特性がストレスの高さと関係しているということである。生理指標に基づく内的状態の評価から示された、ストレスの高さと関係する特性は、擬適応行動においても気質においても、自己を制御するという機能をもつ特性であった。また、完全主義とストレスの高さとの関係も示唆され、特に完全主義のうち「完全願望」はストレスの高さ、すなわち内的不適応状態との関係が強いと考えられる。今回収集した縦断データのさらなる詳細な分析を現在継続しているが、「擬適応」という適応概念を整理していくうえで、“制御性”という機能と“完全願望”という傾向を軸とする方向性が現時点で定まっている。したがって、今後「いい子」についてこの2つの視点からの考察をすすめていく。

#### (引用文献)

- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1990). Perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 423-438.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social context: Conceptualization, assessment,

and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 456-470.

Hollender, M. H. (1978). Perfectionism, a neglect personality trait. *Journal of Clinical Psychology*, 39, 384.

水野里恵・本城秀次. (1998). 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連 発達心理学研究, 9, 2, 131-141.

中野博子. (2003). 見かけの判断力・真の判断力—よい子が陥りやすい悪循環 児童心理, 792, 1208-1209.

西元直美. (2007). 保育者が認識する「気になる」行動群の検討—事例の回顧的データを用いて— 日本発達心理学会第18回大会発表論文集発表論文集, p. 297

西元直美. (2008a). 3歳新入園児の幼稚園への適応要因—入園前の対人環境要因および個体要因からの検討— 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, p. 529

西元直美. (2008b). 幼児の適応行動と心理的「場」との関連 人間環境学研究, 6, 2, 15-21

西元直美. (2009a). 幼児の擬適応に関する発達心理学的研究 (博士論文) 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科臨床教育学専攻

西元直美. (2009b). 幼児の集団場面における適応行動に関する研究 I— 擬似的適応行動の短期縦断的検討 — 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, p. 156

西元直美. (2010). 幼児の集団場面における適応行動に関する研究 II— 擬適応行動と気質との関連 — 日本発達心理学会第21回大会発表論文集, p. 444

西元直美. (2011). 幼児の集団場面における適応行動に関する研究 III— 幼稚園年少クラスから年長クラスまでの縦断データを用いた擬適応行動の検討— 日本発達心理学会第22回大会発表論文集, p. 291

Putnam, S. P., & Rothbart, M. K. (2006). Development of Short and Very Short forms of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 87 (1), 103-113.

Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., Hershey, K. L., & Fisher, P. (2001). Investigations of temperament at 3-7 years: The Children's Behavior Questionnaire. *Child Development*, 72, 1394-1408.

Rothbart, M. K., & Bates, J. K. (1998). Temperament. In W. Damon (Series Ed.), N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (5th ed., pp105-176). New York: Wiley.

桜井茂男・大谷佳子. (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.

桜井茂男. (2005). 子どもにおける完全主義

と抑うつ傾向との関連 筑波大学心理学研究 30, 63-71.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①西元直美. 幼児の完全主義に関する縦断的検討—発達の変化および気質との関連について— 関西福祉科学大学紀要. 査読有. 第19巻. 2016. pp.1-11

[学会発表] (計 7 件)

①西元直美・山本正顕. 幼児期の唾液中α-アマラーゼ活性に関する基礎研究IV— 3・4・5歳児の縦断データによる検討—. 日本教育心理学会第57回総会. 2015年8月. 新潟コンベンションセンター (新潟).

②西元直美・山本正顕. 幼児の擬適応に関する検討II— 縦断データに基づく唾液中α-アマラーゼ活性との関連—. 日本発達心理学会第26回大会. 2015年3月. 東京大学 (東京).

③西元直美・山本正顕. 幼児期の唾液中α-アマラーゼ活性に関する基礎研究III— 幼稚園場面での縦断データを用いた検討—. 日本教育心理学会第56回総会. 2014年11月. 神戸国際会議場 (兵庫).

④西元直美・山本正顕. 幼児の擬適応に関する検討I— 唾液中α-アマラーゼ活性との関連—. 日本発達心理学会第25回大会. 2014年3月. 京都大学 (京都).

⑤西元直美・山本正顕. 幼児期の唾液中α-アマラーゼ活性に関する基礎研究I— 気質との関連—. 日本教育心理学会第55回総会. 2013年8月. 法政大学 (東京).

⑥山本正顕・西元直美. 幼児期の唾液中α-アマラーゼ活性に関する基礎研究II— アミラーゼ活性ときょうだい順位との関連—. 日本教育心理学会第55回総会. 2013年8月. 法政大学 (東京).

⑦西元直美. 幼児期における完全主義と擬適応との関連. 日本発達心理学会第24回大会. 2013年3月. 明治学院大学 (東京).

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西元 直美 (NISHIMOTO, Naomi)

関西福祉科学大学・社会福祉学部臨床心理学科・准教授

研究者番号：50390117

### (2) 研究協力者

山本正顕 (YAMAMOTO, Masaaki)

武庫川女子大学子ども発達科学研究センター・研究グループメンバー